

[報告]

献血啓発としての学校出前講座の実践とその意義

愛媛県赤十字血液センター
松坂俊光, 高本 功, 兵頭和夫

The significance of the delivery school lectures for the enlightenment of blood donation

Ehime Red Cross Blood Center
Toshimitsu Matsusaka, Isao Takamoto and Kazuo Hyohdoh

抄 録

我が国の輸血用血液は、高齢化による需要増大と、少子化・献血意識の減退による献血の減少によって、需要供給のバランスが崩れて来ている。献血増大の切り札である若年者への啓発は、“言うは易し、行うは難し”である。愛媛県赤十字血液センターは、この若年者啓発には、学校における生徒への献血教育が最も効果的であると考え、平成21年度から実施している。県内すべての地域において、主として中学校を対象にしているが、平成21・22年度の出前講座の結果、生徒達の輸血用血液への認識が向上し、その結果として、献血への意識が著明に高まることが分かった。このことから、今後、高等学校での校内献血、役所、企業、市街での若者の献血が増えることにつながる事が期待される。

(本論文の要旨は第35回日本血液事業学会総会・演題番号50に発表した)

Key words: delivery lecture, school, enlightenment, blood donation

はじめに

我が国の献血者数は平成3年頃をピークに減少の一途をたどっている^{1),2)}。とりわけ、20歳代・10歳代の若年者の献血者の減少がその最大の要因である。一般人の献血率向上が必須とはいえ、それは至難の業である。近年、厚生労働省、赤十字本社、各行政団体において若年者への献血啓発は叫ばれ続けられているが、その決定打になるものは見つかっていない。献血現場に立って、若年者に、これまでの献血に関する学習の経験を聞くとほぼゼロである。これが現在の若年者献血減少の

主な原因と考えた。この現状を打開するためには、教育的環境に踏み込む必要を感じ、学校での出前講座を実践して来た。その結果、今後の献血啓発の切り札として大きい手応えを感じているので、ここに報告する。

対象および方法

平成20年秋に愛媛県教育委員会の義務教育課および高校教育課に献血に関する学内授業と啓発資料の配付についての後援申請書を提出した。後援許可を受けたので、平成21年度になり、主として

県内中学校、一部小学校から始め、後に高校、大学においても出前講座を開始した。中学校においては、県内約140校すべてを訪問し、学校長との折衝において、県の後援があること、その趣旨、および講座の内容について説明した。平成21年度は、年度途中からになった関係で、結局16施設に終わった。平成22年度は、前年度中の折衝もあり、県内すべての地域において合計72施設に行くことができた。なお、23年度は約80施設を目指している（図1）。講座の内容は、献血に偏らないように心がけ、興味・関心・好奇心の大切さ、マザーテレサが「愛の反対語は無関心」と言ったこと、薬物乱用・タバコ・アルコール・ネットの問題点、ビデオ「ありがとうっていっぱい言わせて」、貧血の意味と影響、医師から見た命の重みについて、震災を通じての「人と人の絆・思いやり」の大切さ、献血は「横の命のリレー」であること、パレスチナの少年の心臓移植に関わる感動物語、コミュニケーション能力の重要性、などを50～60分にまとめて話している。平成22年4月より10月までの約半年間、講座前と後に同様の内容で意識に関するアンケート調査を行い、講座後には学校の主導で感想文が課され、その一部を送ってもらった。

結 果

平成21・22年度に、県内すべての地域において、小学校12、中学校58、高校8、大学等10、合計88施設を訪れ、延べ13,213人に講座を行った。アン

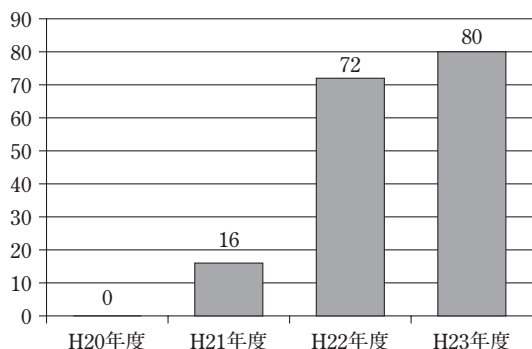


図1 出前講座実施施設数(H23年度はほぼ確定数)

ケート調査は、小学校156人、中学校3,218人、高等学校415人、生徒数合計4,234人(施設数合計43)に回答を得た。

アンケートにおいて、「献血血液の使われ方」について“知っている”は講座前では、小学校20%、中学校23%、高等学校16%、平均22%であったが、講座後“分かった”が、小学校87%、中学校91%、高等学校75%、平均89%に上がった（図2）。また、「17・18歳になったら献血する気持はあるか」という問に対して、講座前は、小学校41%、中学校40%、高等学校40%、平均40%が“ある”と回答したが、講座後は小学校87%、中学校80%、高等学校61%、平均78%に上がった（図3）。男女差では、前後とも女性の方がやや意識が高かった。学校群別で“したくない割合”は、講座前ではどの学校群でも約60%であったが、講座後は小学生、中学生で20%以下になったが、高校生では39%であった。

また、“献血意識に地域差があるか”については、県内3地域にその差はほとんどなかった(背景に地域によって産業の種類が異なることを意識した)。「移動採血車を見たことがあるか」の問に対しては、“見たことがある”61%、“ない”39%であった。年齢が増すにつれて経験が多くなったが地域による差はなかった。「献血をしたくない理由」は、“注射が嫌い・怖い”が28.7%、“元来貧血がある”19.3%、“個人の自由だ”22.4%であった。

考 察

血液センターの献血現場において、20歳代の献血者に、「あなたはこれまでに献血について学んだことがあるか」と聞くと、ほとんど皆無である。このことから、学校の学習指導要領に献血が取り扱われていないことが若年者の献血意識の衰退に関係していると考えられる。指導要領導入を待っていても時間が過ぎるばかりであるので、その対策として、血液センターが自主的に献血に関する教育的環境を構築する必要があると考えた。筆者は、義務教育段階、中でも中学校、とくに3年生がベストと考え、県内すべての中学生に卒業までに献血のことを聞いて卒業してほしいと思っている。3年生が効果的という理由は、体や血液のこ

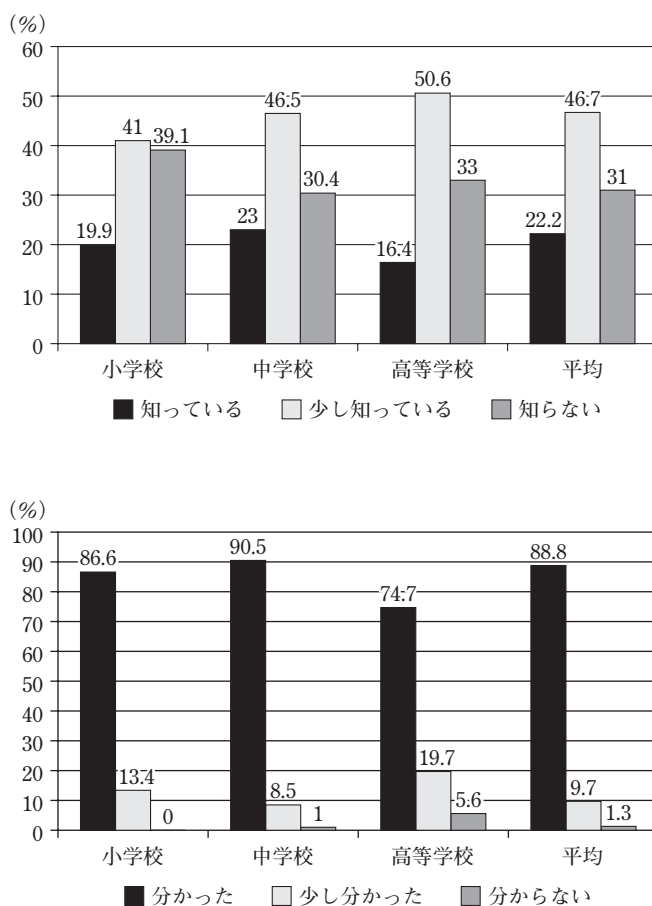


図2 血液の使われ方について(上：講座前，下：講座後)

とを履修している，感受性が豊かである，聴講態度がまじめである，2年後には献血可能年齢に達するので自分のことと捕らえやすい，などである。溝口ら³⁾は，小中学校での出前講座が献血の手技に対する不安の解消と献血の意義の理解を助けると言っている。波多江⁴⁾は，献血ふれあい事業としての高校献血と出前授業を行い，高校での経験を推進している。

現行の新血液法においては，国，地方公共団体，および採血事業者(日本赤十字社)それぞれにおいて，輸血用血液の安定供給確保のために学校での啓発を勧めている。高等学校における啓発と生徒の献血行為には社会の理解はほぼ定着して来ている。一方，義務教育段階における啓発も厚生

労働省において戦略化されている。たとえば，平成21年3月10日に厚生労働省医薬食品局血液対策課の学校教育における献血の啓発に関する提言と戦略において，次のように述べられている⁵⁾。“かつての集団献血に代わり，献血の意義と重要性を若年層に正しく伝えていくためには，学校の授業で「献血」について積極的に取り上げてもらうことが極めて重要である。具体的には，高校・中学校の教科書などで「献血」を課題にして取り上げてもらうための国および地方公共団体における積極的な取り組みが早急に必要である。さらに，小学生を対象とした取り組みについても，年代にあった啓発教材の製作と活用などに，一層力を注ぐべきである。”さらに，平成24年1月11日付厚生労働省

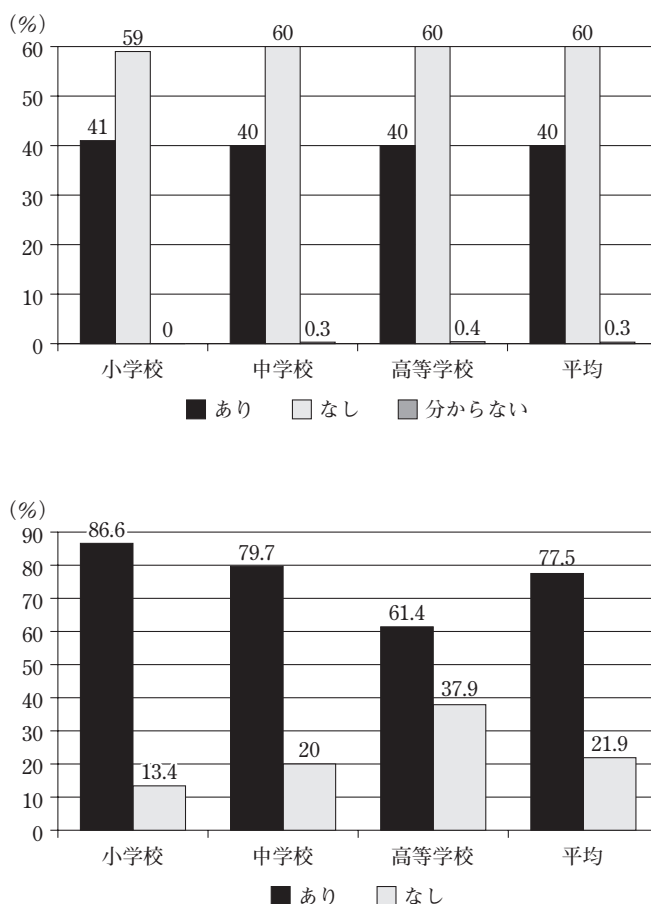


図3 17・18歳になったら献血する気持はあるか(上：講座前，下：講座後)

医薬食品局血液対策課より文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課宛に、「学校における献血に触れ合う機会の受け入れについて(依頼)」の通達が出されたが、さらに後者より各都道府県・指定都市の教育委員会学校保健主管課に同趣旨が送られる一方、赤十字の血液事業本部長、各血液センター所長にも通達され、事業者としても高校・中学校への取り組みが要請された⁶⁾。

学校に対する赤十字の関わりは、各都道府県支部の行う青少年赤十字活動が教育行政公認のもと、教育現場において、義務ではないものの地域住民との協調下になんかなり積極的に行われていると考える。その活動と一体または側面から血液センターも加わり献血の意義についての啓発を行って

いるところである。筆者らは献血出前講座もその赤十字活動の一環との認識を持っているが、行政(県の教育委員会および保健部業務課等)がより積極的に後援してくれる点が異なるかもしれない。講座の内容は、政治や宗教の色彩は一切なく、普遍的な人間愛の赤十字思想を踏まえた人道の普及活動の範囲であり、偏向の懸念は全くないと確信している。人の命、思いやり、人と人の絆、助け合い、愛、また、医療現場の体験からのそれらや健康増進に関することを語っている。一方、実施した多数の学校において、初めこそ献血の割合がやや多いので減らした方が良いとの助言をもらったが、現在は教育的効果を十分認識してもらい、ほとんどの学校において学校運営の面で有意義で

あるとの観点から、次年度も来てほしいとのメッセージを受けている。献血という社会貢献について話しているが、決して献血の無理強いはしていない。

当センターが出前講座前後に行ったアンケートによって分かることは、献血についてはもちろん、“献血血液がどのように使われているかを知らなかった”，その上で、“どう使われているかが分かったという驚き”，このことが最も重要な事実である。そして、17・18歳になったときに献血をするという気持ちが、講座の前の約40%から講座のあとでは約78%に倍増することは、明らかに、輸血血液の意義を認識した上での献血参加の意思表示と考えられる。このことが、若年者への献血教育の重要性を物語っている。では、学齢の時期はいつがよいかであるが、アンケートでは、小中学校においては、いつでも良いとも考えられるが、筆者は先に述べた理由によって中学3年生を勧めたい。高校生はやや献血意思が低い(学校数・生徒数が少ないのでバイアスも考えられる)、実際に献血できるという意味で講座の意義は大きいと考えている。献血をしたくない理由では、“注射や痛いことに対する恐怖”が最も多いことは、過去の全国紙⁷⁾でも同じである。また、すでに中学段階で“貧血”を気にしていることは、成長期の健康のあり方、とくに食育の問題として家庭も含めた対策が必要である。“献血は個人の自由”というものもかなり多く、年齢が増えるほど多くなる。成長につれて自我の目覚めによって、個人の権利意識が強くなるのは当然であるが、中等教育の課程において、他人や社会との関係、人と人のつながり、思いやりや助け合いの精神を育む必要性も感じる。

次に、中学生の感想文の一部(抜粋)を転記する。

『(中3)私のお父さんは献血バスが来ると毎回献血をしている。これまでは、「何で献血をするのだろう?」と思っていた。でも、今日の講演で、する意味がよく分かったし、お父さんを尊敬した。私も将来献血ができるようになったら、できるだけ参加したいと思う。

(中3)献血によって、面識のない人でも命の輪

がつながれて行くんだなぁと思った。誰かが病気で苦しんでいるときに、救いの手をさしのべる。そんな人がいるからこそ明るい社会が成り立っていると思う。命に関わることは人間でしか救えないことも改めて感じた。献血については知らなかったが、献血には人を救おうという思いが込められているのだと思った。

(中3)血液は、人間にとって大切なものなのだと分かった。注射したときの痛みと血液を待っている人の痛みとをくらべると、注射の痛みなんて“へいちゃら”なような気がする。

(中3)2つのビデオを見て、患者さんが希望を持ち病氣と闘い続け、家族は全力で看護し、偉大だなぁと思った。僕は、両親から授かったたった一つの命を、今日、生きられなかった人の分まで精一杯、悔いのないように生きたいと心から感じた。

(中3)献血がどれだけ大切で、求めている人が多いことが分かった。血をあげることによって人が助かるのだとも分かった。この講演を聞いていなかったら、大人になっても献血のことを知らないうままで、興味もないままだったと思う。

(養護教師)献血について詳しく知ることができ、「献血したい」と心から思える内容でした。是非、生徒たちにも聞かせたいです。エイズリスクも含めて、しっかりと正しい知識を、私も生徒も身につけていきたいと思います。子供たちに「関心」を持つことを伝えるに当たり、とても役立つ内容でした。知ろうとしないことは罪だという言葉がとても胸にひびいています。今後も、教師として、人として、学び続ける姿勢でありたいと改めて思いました。』

このように、生徒の感想文では、多くのものが極めて感動的なものであり、献血の重要性についての強い認識が表明されている。講座の内容にもよるであろうが、いのち、愛、絆、助け合い、人というもののすばらしさ、興味や関心の重要性、など、講座で目指している目的が十分に達成されていると自認してところである。

ところで、これまでの経験で、この試みにおいて留意しなければならないことがあることも分かった。それは、学校における献血の啓発では、学

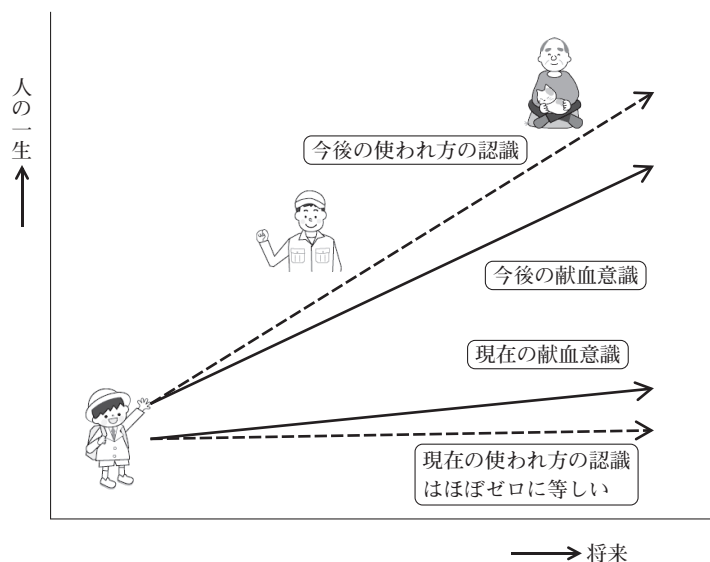


図4 出前講座による献血意識の変化(期待と推測)

校は献血というものの意義は十分理解しても、日本赤十字社という一企業のPRと思われるが進まないことである。つまり、ここでは“日赤ブランド”は通用しないということである。これは、我々日赤職員の“献血は重要との思い”とは相容れない。なぜなら、学校にはこの講座に何の義務感もないからである。学習指導要領で献血が扱われ、軽い強制力が働かないと学校での啓発は容易ではないことを意味する。また、行政力で進めても、そこに教育的視点でのメリットを感じてもらえないと、2回目からは断られ、一時的な活動に終わる可能性が高い。命、愛、絆、助け合い、人権、道徳、保健などをミックスした視点での内容が望まれる。その点では、臨床経験がある人(医師など)がよいであろう。筆者は、義務教育での指導要領に早く導入してもらうために日本赤十字本社と厚生労働省が文部科学省に働きかける必要があると思っている。

図4は、これまでの血液の使われ方に対する認識と献血意識が極めて低い状態にあり、このままでは将来も変わらないのではないかと推測と、我々の取り組みによって、この二つが大きく向上するだろうというシミュレーションを模式化

したものである。

一般に、社会性の強い分野の教育は、足固め10年、発展・完成期までに20年を要する。子供達への災害教育、人権教育、芸術や文化・スポーツの育成、コミュニケーション能力の育成、などがその例であろう。献血もその一つであり、10歳代での啓発、20歳代での実践、30歳代でその子供への伝達、を考えると、社会で20年間の長い取り組みが必要であることを、赤十字も政府も市民も認識すべきだと考える。全国的な人口構成のいびつ化、今回の震災の影響、若年者の意識低下を考えると、この学校での啓発を全国規模で展開することが必要であると考えます。

この試みが、献血が可能年齢になった後どの程度貢献しているかの検証が必要であることは当然であり、開始した頃の生徒がその年齢に達する平成24年度から、献血の動機になったか、および、献血者の増加につながっているかを調査して行く方針である。

結 論

愚直に学校に足を運び、“いのちの講座”として子供達に語りかけているが、予想以上の反響があ

るので、このまま続けることによって高校生献血、若年者献血が増えることを期待している。また、全国的な展開が必要とも思っている。ごく近

い将来、この試みの検証を行い、良い結果が得られることを期待しながら進めて行きたい。

文 献

- 1) 血液事業関係資料集 平成22年度版(財団法人血液製剤調査機構)
- 2) 愛媛県赤十字血液センター 平成23年度年報
- 3) 溝口秀明, ほか: 小・中・高等学校における献血出前講座の高校生の献血に与える影響. 血液事業, 34 : 130-131, 2011
- 4) 波多江英明: 小・中学生に対する「献血ふれあい」出前授業の実施について. 血液事業, 34 : 132-133, 2011
- 5) 厚生労働省医薬食品局血液対策課: 献血推進のあり方に関する検討会報告書. 平成21年3月10日
- 6) 厚生労働省医薬食品局血液対策課: 学校における献血に触れ合う機会の受け入れについて(依頼). 通達 平成24年1月11日.
- 7) 読売新聞(平成18年5月11日)記事 献血未経験の若者「献血知らない4人に1人」